
りんぷんのあと。

ナナエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんぷんのあと。

【Nコード】

N4192Z

【作者名】

ナナエ

【あらすじ】

本編「地獄蝶が泣いたとき」の番外編。本編で語られなかった話を短編形式で載せていきます。作者が多忙のために（あと「die and locus」という長編、その番外編を掛け持っているために）、更新は亀以下のスピード。これを読まなくても本編の物語を読みすすめるのに支障はありません。

※元々番外編はやっていく予定がありませんでしたが、有難くも様々な方から要望がありましたので、書かせていただく次第となりました。よろしく願いします！

太陽のような　く前く（前書き）

本編「地獄蝶が泣いたとき」の、序章と第一章の間の物語です。

太陽のような　（前）

すまぬ。

すまぬ。一護。

貴様が死にかけたのは、私のせいだ。

I was wondering if you could
understand my mind.

「もう心配はいらないでしょう。傷もふさがり、あとは意識を取り戻すのを待つだけです」

そう言われ、心底安堵するルキア。

卯ノ花に向け、深深と頭を垂れた。

「ありがとうございます」

「いいですよ、お礼なんて」

大変でしたね、と笑いかける。

「それで、一護は…」

「この奥の部屋ですよ」

もう一度、卯ノ花に感謝の会釈をすると、その横を通り過ぎ、彼がいる病室に入った。

日が照り出してくれていて、部屋の中は明るく、あたたかい。足音を立てずに、ベッドにゆっくりと近づいた。

そこには、青白い顔のまま眠っている、黒崎一護の姿がある。

「……………」

彼の呼吸は浅くもなく、ただひたすら目を閉じているだけ。

そのうち目を覚ますであろうに、ひよつとしてこのまま固まって、二度と瞼が開くことはなくなるのではないかという恐怖があった。

『ありがとな』

歯を食いしばる。そうしてないと、自責の念に絡み取られて、涙が零れそうだった。

『おかげで、心はここに、置いていける』

…だめだ。

ルキアは頭を振った。

だめだ。あんなこと、二度と起きてはいけない。

志波海燕。ルキアの、かけがえのない師。

お気楽で、無邪気で、妙に子供っぽくて、なのに優しくて、鋭くて、近くにいるとあたたかくて…。

太陽のような人だった。

二度も、太陽を自ら覆い隠すほど、自分は愚かでないと思いたい。皆を照らし出す太陽が消えれば、世界は冷え切る。そういうものだ。この黒崎一護も、また、太陽のような存在なのだ。

海燕と比べれば、どこかまだ不器用な陽の注ぎ方で、しかし必死に、皆に平等にふりかけようとしている。だから皆があたたかくなれるのだ。

———ゴン、ゴン。

壁を叩く音がして、振り返ってみると、恋次が立っていた。

「よう」

手を挙げ、近づいてくる。彼も、一護の容体を案じて、幾度も総合救護詰所に足を運んでいるらしいことは、白哉を通じて知っていたが、ルキアが長居しているために見事時間が合ったようだ。

「卯ノ花さんから聞いたぜ。もう大丈夫なんだってな」

「ああ」

恋次から視線を外す。

彼はルキアの横に並び立ち、眠る一護を少し覗き込んだ。

「本当、しぶてえよなあ、コイツ。どーせ死なねえなら、とっとと起きりゃいいのにな」

軽い口調だが、その目は少々心配そうな光が見える。

意識を取り戻していない一護は、顔色が悪く、眉間の皺もいつもより随分深く刻まれている。いっそ、死んでしまったほうがもう少し楽そうな顔になるのでは、というほどだ。

「ああ。全くだ」

ルキアは腕組みをして、頷いた。

その後の僅かな沈黙の後、彼女は恋次の方を見る。

「どうして一護は、死にかけておったのだ？」

「……はあ？」

質問の意図が読み取れず、眉根を寄せる。

「何故一護は人間なのに、戦っておるのだらうと、考えていたのだ。こやつが意識不明で、十日間面会謝絶の状態で、集中的な治療を受けていたときから、ずっと」

俯いて、目を閉じる。

「いくら護るといっても、だからといって、一護に戦う必要があるとは思えぬのだ」

分からない。否、分からなくなってしまった。

一護はどうして、戦っている。

護ることは即ち、戦うことになるのか。本当に、そうなのか。

いや、護ると言っても、戦う以外にあるはずだ。一護には、ユウレイが見える。そのユウレイも、優しく触れてやることで成仏させ

てやる。それで充分、そのユウレイを「護った」といえるはずだ。もっと言ってしまうなら、一護には、ユウレイではなく、学校の友達や、かつて尸魂界に共に乗り込んできた人間の戦友や、家族がいる。きっとこれから、彼女もできるだろうし、やがては子供だってできる。全てが護る対象で、それは、彼がただそこにいてあげる、というだけで充分、「護る」ことに値するはずなのだ。果たしてそこに、一護にしか見えない「化け物」：「虚」^{ホロウ}を滅するべく戦って「護る」ことは、必要なことか。それはその護るべき対象の彼等からして、「護ってもらっている」ことになるのか。

何の罪もない人間が、どうしてこう何度も死にかけなければなら
ない。

答えが、見えない。

……死なせたく、ない。

「……ルキア、お前……」

恋次の言葉が続く前に、ルキアは彼の腕にポンと手を置く。

「いや、深い意味はないのだ。忘れてくれ」

彼女はそのまま、一護の病室を辞した。

太陽のような　く前く（後書き）

色々な方から要望がありましたので、とうとうやっちゃいましたよこの作者は。

「地獄蝶が泣いたとき」の、番外編です。わーい。↑

何から書こうかな、と思ったのですが、とりあえずは元々、ウチの頭の中にあつた、「一護から死神の力を奪う」ということをルキアがしよう、と考えるようになるまでにあるお話を書こうかな、と思いました。

初っ端から一護が生死の境をさまよっているようなそんな状況。一応、卯ノ花は大丈夫だと言ってますけど。ちなみにここから一護、実は一ヶ月近く昏睡状態のままです。それは後編で書けるかな。

あ、この「As Sun」、く前くく中くく後くの三本で完結しますよ。

それでは、忙しいので更新ペースがよろしくないのですが（「die and locus」優先でいくので余計に遅いです）、よければよろしく願います！

それでは、これにて。

感想、アドバイス等お願い致します！

太陽のような　（中）

すまぬ。

すまぬ。一護。

貴様が死にかけたのは、私のせいだ。

貴様に力を与え、死神としてしまった。

そして、弱い、私のせいなのだ。

すまぬ。一護。

What do you say to breaking
off your relationship with him?

8

斬魄刀を大きく後ろに引くと、一気に振るって目の前の虚を滅す。
これで三匹目だ。

溜息を吐き、周囲に視線を巡らす。しかし、瞳に映るのはせいぜい空を飛び回る鴉ばかりで、黒い着物を着た afroヘアの男性など
は見当たらなかった。

（車谷殿は…本当に仕事をしておるのか…？）
首を傾げる。

朽木ルキアは今、現世にいた。“駐在任務”というやつだ。

一応現世の空座地区を担当する死神・車谷善之助はいる。しかし、

尸魂界側も一抹の不安を感じたか、今回、かつてにも現世駐在をしたルキアが命じられ、車谷と共に虚の昇華・滅却に努めよ、とのこと。

：...どういいうわけか、彼に会うのは、いつもルキアが虚を斃し終えてからなのだが...

もしかしたら、これまでもほとんど、一護や特殊な力を持つ人間——主に石田雨竜、井上織姫、茶渡泰虎——によって虚は斃されていたのかもしれない。

ルキアは呆れ顔で、肩を軽く揉む。

その、改めて開かれた目は、憂いを帯びている。

死神代行・黒崎一護。命に別状はない、と教えられて、もう二週間になる。彼はまだ、一度も意識を取り戻していなかった。

『変化あったら、連絡入れるからよ!』

現世に行く時、恋次はそう言っていたのだが、待てども待てども連絡はない。

つまり、一護には良くも悪くも、何の変化も起きていないと、そういうことなのだ。

あるビルの屋上におりた。抜いたままにしていた斬魄刀を、鞘におさめる。その、チン、という音が、虚しく響く。

彼の傷の重さを、知っていたつもりだった。

けれど、卯ノ花は、ルキアがショックを受けるのを考慮してか、本当のことを教えてくれていなかったことが分かった。

ザッ、とルキアは瞬歩を使い、浦原商店の前に現れる。

ゆっくりと顔を上げて、古ぼけた風である店の看板を見上げる。

『黒崎サンは、大丈夫でしたか?』

現世駐在にあたり、居候を少しの間させて欲しいと訪れたとき、浦原の口から吐かれた最初の科白。

一護はあのととき、浦原商店を介さずに四番隊に直に発見され、尸魂界の救護詰所へと運ばれた。それで、どうして彼が大怪我したことを知っているのだろう。

『あれ、アタシも、治療に手を貸してくれて言われて、黒崎サンのところに行ったんすけど…』

寧ろ、それを知らなかったルキアに、浦原は意表をつかれたような顔をしていた。

——何故貴様が、一護の治療に呼ばれるのだ。

素朴な疑問。

涅マユリが本来なら担う役目である。しかし、彼はこここのところ、かつての浦原に張り合っって新たな義骸を作成することに没頭しているのだ。それは誰もが知っていることであり、彼が一護の命と、自分の研究を秤にかければ、当然自らの研究に傾くことは、一癖も二癖もあるマユリにしてみれば当然の結果だ。そして、元十二番隊長の浦原に白羽の矢が立ったと、そこまではツラツラと説明した。

浦原は、その先を言うか迷っている様子であったが、帽子を被りなおしながら、少し言葉を濁しつつ…

『黒崎サン…かなりの臓器が、だめになってたんす』

ギュッと拳を握り締める。

唇を噛み締める。

何でも話を聞くところによると、あの妙に強い虚の繰り出した爪の攻撃が彼の背に炸裂した際、内臓を抉り取るようにして蠢いていたような痕跡があったのだという。

『胃は文字通り潰されていて、小腸や大腸もかき混ぜたかのように滅茶苦茶にされていました。肝臓や腎臓も勿論アウト。肋骨も結構折れていて、肺も片方は原形を留めなくらいグチャグチャにされていました。正直、黒崎サンが即死しなかったのは、奇跡っスよ』

本来、生きていられるようなものではない。

だが彼はその状態で、霊圧を消耗する月牙天衝を使い、虚化も行った。

そして、自身は「辛い」などといえる程度では済まないようなものであるにも関わらず、真っ先にルキアの心配をした。

『彼が死ななかったのも、言い方は悪いですが、持て余していた強大な霊力があってこそです。死神の生命力は、霊力の高さ。そこに救われましたねえ。それに、黒崎サンは元々、霊力のコントロールは苦手ですから、霊力が底をつく前に限界を感じて、偶然残ったのかもしれない』

…どうしてだ。

どうして皆、私を護って、自分を省みない？

———悪い。キツかったろ。

海燕殿…。

どうしてのですか。あのとき、私は、貴方を救ってなどいなかった。私は、虚に憑依された貴方を見ていられなくて、苦しくて仕方なくて、自らを救うために刃を向けたのです。

なのにどうして、謝られたのです。どうして、私のことを案じるのです。

あのとき、私がそこにいなければ、海燕殿は、生きていらっしまったかもしれません。なのにどうして、貴方は最期まで、私のことを護ってくださるのですか。

————…放さねえぞ…誰が放すかよ…バカ野郎が…！

恋次…。

どうして私を放して、逃げなかった。私を置いて下がれば、貴様はあるとき、深手を負わなくて済んだのではないのか。私は、傷ついていく貴様を、見ていられなかった。だから、自分から離れようと、そう思ったのだ。なのに、貴様は私を放さず、寧ろ手に力を込めていた。絶対に放さないという覚悟が、伝わってきた。

どうして私を放さなかったのだ。

どうして皆が揃って、こうなのだ。

一護においては、元々あやつは、人間なのだ。なのに、どうして私を…。

……あやつは……、

そこで私は、今更のように思い出す。

そうだ。あやつは、元々、人間なのだ。「死神」ではないのだ。だからこれだけ、悩んでいる。「死神」でもないのに、ヤツはどうして「死神」として戦って、護って……、

「……私の、せい………?」

———貴様が、死神になるのだ!

そうだ。

戦う要因となった、死神の力を譲渡したのは、他でもないこの私だ。

何故、気付けなかった。

……一護が死にかけている、その原因。

それは、
「私」
だ。

太陽のような　く中く（後書き）

頑張って更新。「A s S u n .」だけでも終らせようと意気込んです。↑

一護が目を覚まさず、ルキアも随分暗い様子で現世にいます。車谷はきつとどこかで寝ているのでしょう。

そして、ルキアは自分の中で、「どうして一護が死にかけているのか」の答えを探していたわけですが、今回にしてそれに気付いたようです。その答えが、正解なのか、それとも間違っているものなのかは、別として。

そういえば、マユリの研究している義骸というやつですが、これが本編での例のキーアイテムともいえるものですね。彼はここらへんから既に作成にとりかかっていた、という衝撃事実（笑）↑

次で「A s S u n .」は完結しますが、次回一護が意識を取り戻します、多分。

早めに更新したいと思っていますのでどうかお待ちを。

それでは、これにて。

感想等いただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4192z/>

りんぷんのあと。

2011年12月15日20時56分発行